

第19回舟橋聖一文学賞
第37回舟橋聖一顕彰青年文学賞
受賞録



彦根市





はじめに

彦根市長 田島一成

舟橋聖一文学賞ならびに舟橋聖一顕彰青年文学賞の受賞者の皆さま、このたびのご受賞、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

文豪・舟橋聖一氏の名作『花の生涯』は、昭和三十八年にNHK大河ドラマ第一作として放送され、これを機に井伊直弼公や彦根の名が全国に広まりました。本賞は、氏の偉業を後世に伝えるために設けたものです。

舟橋聖一文学賞は、彦根市民が豊かな心を育み、市に香り高い文化を築くため、すでに世に出た優れた小説の中から、舟橋聖一文学の世界に通ずる作品にお贈りしております。一方で、舟橋聖一顕彰青年文学賞は、公募によって全国から作品を募り、将来を嘱望される若い書き手たちの創作意欲と才能に光を当てる賞として、文学を志す若者たちの成長を後押ししながら、教育や文化の振興へと繋げていくことを目的としております。今回も青年文学賞には多数の応募が寄せられ、豊かな感性で描かれた作品の中から可能性に満ちた受賞作が選ばれました。

創作という営みは、ひとつずつ完成に至るまで、幾度も自身の言葉と向き合い、悩み、試行錯誤を重ねる地道な道のりです。しかし、その過程こそが、作品に深みと真実をもたらします。受賞された皆さまには、それぞれの立場から文学に向き合つて生まれた成果を誇りに、これからも筆を執り続けていただければと願っております。

現代社会は、情報化やデジタル技術の発展により、利便性が増す一方で、人と人とのつながりが希薄になりがちな側面もあります。だからこそ、物語や文章が生み出す感動や想像力が、人々の心を結びつける役割を果たしているのではないでしょうか。文学には、時代を超えて人と社会をつなぎ直す力があります。

本市では今後も、舟橋聖一氏の功績を顕彰し、その精神を受け継ぎながら、郷土が育んだ文化的資産を活かした文学振興を継続してまいります。本賞を通じて、より多くの方々に文学の魅力や創作の喜びが伝わり、新たな表現者が羽ばたいていくことを心から期待しております。

最後に、選考にご尽力いただきました委員の皆さま、本賞の開催・運営に関わってくださつたすべての方々に深く感謝申し上げるとともに、受賞者の皆さまの今後ますますのご活躍を祈念し、あいさついたします。

令和七年十二月

《舟橋聖一文学賞・舟橋聖一顕彰青年文学賞選考委員》

佐藤洋二郎



福岡県生。作家。元日本大学教授。『夏至祭』で第十七回野間文芸新人賞・『岬の嵐』で第四十九回芸術選奨文部大臣新人賞・『イギリス山』で第五回木山捷平文学賞受賞。主な著作・・・『夏の響き』『未完成の友情』『お母さんブタのダンス』『グッバイマイラブ』『親鸞 既往は咎めず』『Y字橋』『夜を抱く』『日本史の嘘』など多数。

藤沢周



新潟県生。作家。元法政大学教授。昭和五十九年・平成八年書評紙『図書新聞』の編集者を務めた。平成五年『ゾーンを左に曲がれ』で作家デビュー。平成十年『ブエノスアイレス午前零時』で第一・九回芥川賞を受賞。主な著作・・・『死亡遊戯』『紫の領分』『ソロ』『サイゴン・ピックアップ』『焦痕』『箱崎ジャンクション』『雪闇』『心中抄』『キルリアン』『波羅蜜』『武曲』『武藏無常』『サラバンド・サラバ』『世阿弥最後の花』『鎌倉幽世八景』など。

増田みづ子



東京都生。作家。昭和六十年『自由時間』で第七回野間文芸新人賞受賞。『シングル・セル』で第十四回泉鏡花文学賞・『夢虫』で第四十二回芸術選奨文部大臣新人賞・『月夜見』で第十二回伊藤整文学賞受賞。主な著作・・・『麦笛』『自殺志願』『内気な夜景』『火夜』『小説』『理系的』など。

富岡幸一郎



東京都生。文芸評論家。関東学院大学教授。『意識の暗室 増谷雄高と三島由紀夫』で『群像』第二十二回新人文学賞評論最優秀作受賞。『戦後文学のアルケオロジー』『仮面の神学 三島由紀夫』『使徒の人間 カール・バルト』『千年残る日本語へ』『最後の思想 三島由紀夫』『古井由吉論 文学の衝撃力』など多数。近著に『石原慎太郎の時の時 「戦後」への最後の反逆者』『ビジネスエリートのための教養としての文豪』など。

第十九回 舟橋聖一文学賞受賞者



(c)関めぐみ

作品名 『惣十郎浮世始末』

著者 木内 昇 (きうち のぼり)

発行所 中央公論新社

発行日 令和六年（二〇二四年）六月十日

著者略歴

一九六七年、東京都生まれ。二〇〇四年『新選組 幕末の青嵐』で小説家デビュー。〇八年に刊行した『茗荷谷の猫』が話題となり、早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞を受賞。一年に『漂砂のうたう』で直木賞、一四年に『櫛挽道守』で中央公論文芸賞、柴田錬三郎賞、親鸞賞の三賞、二五年に『雪夢往来』で中山義秀文学賞、同年『奇のくに風土記』で泉鏡花文学賞受賞を受賞。他の作品に『よこまち余話』『光炎の人』『球道恋々』『剛心』『かたばみ』『惣十郎浮世始末』『浮世女房洒落日記』などがある。

第三十七回 舟橋聖一顕彰青年文学賞受賞者



優秀作品

作品名

胸のイボ

作者

高屋 風沙 (たかや なぎさ)

住所

神奈川県横浜市

第十九回 舟橋聖一 文学賞 講評

選考委員 増田 みづ子

『惣十郎浮世始末』 選評

小説の価値は面白さに尽きます。時間を忘れて読みふけりました。作品全体を包む心地よさは素晴らしいです。主人公が格別に善人であることも、それなりの悩みをひそかに胸に抱えていることも好ましく感じました。叶うなら隣の家に住んでいてもらいたいと思いました。何か困ったことがあります

つたら声をかけてね、と言つてみたりしたいです。誰にでも好かれる惣十郎は、捕り物名人の同心を越えて、ヒーローに近いです。こんなにいい場面ばかりの小説を書いてくれる作家はめったにいないと思いました。

第十九回 舟橋聖一 文学賞

木内 昇

『惣十郎浮世始末』 作品についてならびに受賞コメント

「受賞作品のあらすじ」

改革の嵐が吹き荒れ、疫病が日常をおびやかす江戸後期。浅草の薬種問屋「興済堂」で火事が発生し、焼け跡から一匹の骸が見つかった。北町奉行所の定町廻同心・服部惣十郎は、その不審な状況に疑念を抱き、岡つ引の完治や小者の佐吉とともに犯人を追う。一方、町医者の梨春は豊かな知見で惣十郎の調べを助ける傍ら、疱瘡（天然痘）の苦しみから人々を

救うための医療書の翻訳を世に出したいと奔走していた。怪しげな祈祷師の騒動や、湯屋の三助の母殺し疑惑などにも向き合いながら、やがて惣十郎は思いも寄らぬ真相に辿り着く……。罪を見つめて、人を憎まず。江戸の町に生きる人々の哀歎を時代背景とともに丹念に描く、捕物帳の新たな傑作。

「受賞のコメント」

このたびは、舟橋聖一文学賞をいただきまして、大変光栄に存じます。

『惣十郎浮世始末』は、私にとつてはじめての捕物帳となります。本作の連載をはじめるにあたり、付き合いの長い文芸記者の方から「捕物帳を書いてほしい」とのご提案を受けました。それまで捕物帳を書こうと思ったことすらなかつた私は、大変戸惑いました。また、小説の題材に関しては自分で決めていたため、提案に沿つて書くというのもはじめてのことだつたのです。

自分の中での定法に拠ることなく、一作一作なにかしらの挑戦をしようと思つて書いてきたものの、今回は新聞連載という大舞台。あまり冒険するはどうか。でも、自分の仕事によい形で風穴をあけられるかもしれない——だいぶ逡巡したのちに挑戦することにしたのです。

この挑戦が吉と出たか凶と出たか。それは読者に委ねるよりありません。ただ、本作に登場する惣十郎や梨春、完治、佐吉、お雅といった面々と共にいる時間は、私にとつてとにかく楽しい時間でした。そうやって書き上げた作品が、このような賞をいただけて、報われたように感じています。この小説に関わつてくださつた、すべての方に感謝申し上げます。

第三十七回 舟橋聖一顕彰青年文学賞

選考委員 増田 みづ子

講評

小説は好きなことを好きなように書けばいいと思つています。小説を書きたいと思つたのは、その自由さに心ひかれました。一人の人間の、誰も知らない心のうちが、誰にでもわかるように書かれていたのが驚きでした。人の心はわからない。自分の心も整理がつかない。それが知りたくて、次々と小説を読み続けました。大人になる少し前あたりから、小説らしきものを書きはじめました。最初に書いたものがどんなものだったのか覚えていません。形になりませんでした。ばらばらの言葉が、つながりもなく並んでいただけでした。三十歳のとき、初めて何とかまとめることができて、雑誌の新人賞に応募しました。結果、最終候補の四作に残つたという知らせが届きました。で、落選しましたけど、また新しいものを書いて送るよう、という言葉を編集部からもらいました。それ以後も書けなくて苦労しました。どうやつて書いたのか、書き終わると、忘れてします。一作ずつ、書くたびにじたばたします。なかなか内容のある正しい文章が書けない、というのが実感でした。あがいているうちに何とか呼吸困難状態がやつと解消された感じがすると書き終わっています。ずっとそんなふうです。少しもうまくならないし、らくにもならない。でも不思議なことに、飽きない。こ

れしかこんなに夢中になれるものはない、と思つていています。

今回、青年文学賞の審査をしていて、皆さんの作品を読みながら、そういうことを思いだしていました。自分なりの小説の形を作ろうと頑張つている感じが伝わつてくる作品が多くたのかもしれません。小説は、一番大事なのは、真似が厳禁ということです。自分が新しくつくり出さなければなりません。そこが魅力でもあるのですが、案外その実現がむずかしいのは、ほとんどの人が小説を書き始めるのは人の小説を読んで自分もこういうものを書きたいと思うからです。

「胸のイボ」受賞おめでとうございます。まず、タイトルにびっくりしました。このタイトルで小説を面白く読んでもらうにはどうすればいいか、考えました。書けません。でもこの作者は自分のおばあちゃんの胸のイボを作品の中心におきました。おばあちゃんのイボなら孫娘はその胸に抱かれてそのイボに愛しさを感じる、と読みながら気がつきました。そして自分の祖母にも鼻の横に大きなイボがあつたのを思い出して急に愛しくなりました。老いて、せつないよ、といふのが口癖になつた祖母を、孫娘が身の回りの世話をするようになる、大変だけど孫娘の記憶のなかに祖母のシンボルの

ようにはイボが残る。やがて自分にも同じ場所同じ大きさのイボができる。気持が悪くてとつてしまふ。結婚して子供ができると、その子供にも同じようなイボが…。この作者の仕組んだ小説の形が見えてきます。

ついでですが私の祖母のイボは母と私を飛び越して私の妹の鼻の横に出現しました。「胸のイボ」を読んだあとはずっとそのことが頭から離れません。小説の力です。

第三十七回 舟橋聖一顕彰青年文学賞

高屋 凪沙

「受賞のコメント」

応募資格の三十歳である最後の年に、賞をいただけて、大変うれしく思います。

この小説は祖母との思い出をもとに書いた話で、温かい思い出も、冷たい思い出も、すべて一人の人間の物語だと思い、作品にしました。自分の祖母との思い出の欠片が、主人公真智や真智の祖母の物語の一部として、自然に溶け込んでいたらしいなと思います。

自分自身は、そんなに長い介護経験がないので、断片的な記憶と調べた内容から介護の場面は書きました。書いていて難しかったのは、祖母の年を取ることへの受け入れ難さ、認知症による混乱です。そんな祖母の姿を見て真智の気持ちに

変化が生じるので、どちらの気持ちも表現したかったです。また対比表現は、読んでいても書いていても好きなので、この作品でも美しい姿と年老いて汚れたままになつている姿を書きました。年を取ることを伝えるのを表現しやすかつたこともありますし、登場人物の性格も表現できたと思います。

人のもつ様々な感情や考えを描き出すというのは難しく、書くことに消極的になることもあります。が、今回このような賞をいただき、より積極的に物語を書きたいと思えるようになりました。これからも日常の中の物語を自分なりに書き出せたらいいなと思います。

作品目次

第三十七回 舟橋聖一顕彰青年文学賞 優秀作品

胸のイボ

・・・・・

高屋 風沙

せつないよ、せつないよお。

そう目の前で消え入るような声で呟いているのは、**真智の**
祖母である。

「せつない」なんて、歌の歌詞でしか聞いたことがなかつた。

実際に言つている人は初めて見たかもしけない。

ベッドの上で、茶色く汚れた天井に、祖母は届かない手を伸ばしている。何かを掴もうとするように伸ばした、微かに震えた枯木のような茶色く皺だらけの手。節だつた指を広げて蛍光灯の光に手をかざして見つめているようにもみえる。

「せつないよ」

相変わらず小さな声で、だが年老いた病人の割には強い語尾でまた呟いた。

何がそんなにせつないのか。今、真横にいて見舞つているのに。そんなにせつないなら、こちらを向いて話をしたらどうなのか。なにか欲しいものがあれば、呟つてくれれば持つてきてくれるし、して欲しいことがあればしてあげられるか

かもしれない。

「何がそんなにせつないの？」

真智はもどかしくなつて、祖母の顔をのぞき込みながら聞いた。

「せつないんだよ！ 戻りたいなあ、昔に戻りたい」

その時、以前から祖母が「昔に戻りたい」と呟いていたことを思い出した。普段は明るい祖母が時々ため息のように呟いていたのだ。幼かつた真智は、意味もわからず、疲れたときに出るため息と同じようなものだと思つていた。

だが、認知症が進んでからはうわ言のように、より頻繁に呟くようになつた。

その度に真智はイライラする。庭先で転んで脚を折つてから、寝つきになつた祖母をかわいそうだとは思う。だからこそ、少しでも助けてあげたいと思って面倒を見てきたつもりだ。なのに、真智のことは見えてないよう虚空を見つめて、思い出したように「せつない」「昔に戻りたい」と言う祖

母を見ると、こちらの方がせつなくなるのだ。

黒い気持ちが胸の辺りで一点に集まつて固まつていく気がした。

観ていたアニメの話を興奮して祖母にも話す。

「来週の話も楽しみだなあ」

真智が幼いとき、両親は共働きで、平日は家にいることは少なかつた。真智が起きる前に出かけ、真智が寝た後に帰つてくるくらい二人とも忙しかつたのだ。だから真智の面倒はほとんど祖母が見ていた。

祖母はただ優しく微笑んでいた。

「おばあちゃんは、どのモンスターが好き？」

「さあ、どれだろうねえ」

夜七時の楽しみにしていたアニメを見終わる頃、祖母は優しく声をかけてくれる。ちゃんと来週の予告まで見終わるのを見計らつて声をかけてくれる。孫娘の大好きなテレビ番組がある時間を把握して、きつちり七時半になるのを待つていて声をかけていた。もちろんその時間にぴったり入れるように湯船に湯を張つておく。

五歳の真智はそんな気遣いに思い至るわけもなく、先ほど

を万歳にして、シャツを脱がしてもらうとき、祖母の顔が正面にきて、一層興奮しながら今日のアニメの山場を再び語りだす。

夢中で話す真智の服を、慣れた手付きで脱がしていく。手

2

さえ感じられる冴えた白色の肌に一点汚れのようなイボがある。少し紫がかつた茶色い、小豆大の隆起したイボが両乳房の間の上辺りに一粒あつた。そのイボがなければ祖母ではないような気もする、祖母の特徴だとも思えた。

湯船の湯を混ぜて湯加減を確かめ、桶ですくつて真智と自分に掛け湯をする。はじめのこの一杯は、肌が慣れていない

ので少し熱く感じる。ひやあつと、肩をすくめている真智をイスに座らせて、祖母はタオルに石鹼を擦り付けて泡立てていく。白いふわふわとした泡は、ケーキのクリームみたいで、見ているとワクワクする。華やかな香りもするので、大人しく洗われるのを待つ。泡のついたタオルが身体を滑る度、洗いやすいように腕を上げたり、顎を上げて首を差し出したりする。毎日の習慣から身体が自然に動くのだ。

優しく丁寧に真智の小さな手足を洗い上げる。一通り洗い終わると、これも優しく桶で湯をかけて流してくれる。一杯、二杯と、左肩から右肩へ、泡を流し終わると、真智を湯船に

入れる。他の子に比べて身長が少し高かった真智は、最近、一人で湯船に入れるようになつた。と言つても、身長一一〇センチ、湯船の高さに対しても股下がギリギリのため、イスを使つて湯船に入る。祖母は心配そうに手を添えながら、真智が湯船に入るまで見てている。

真智が熱がるため、お湯の温度は低めの三十七、八度。それでも湯が混ざつてないと足を浸けた瞬間すごく熱く感じる。桶の先を使つて搔くように湯を混ぜるが、真智の腕は短く底の方まで混ぜきれない。やはり大人に混ぜてもらわないと熱くて入れない。

先ほど祖母が混ぜてくれたおかげで、真智は気持ちよく肩まで浸かれ、ふうっと大人のように息を吐く。

揺れる水面がおさまつてくると、白い柔らかい肌に生えた細かい産毛に、小さな気泡がついているのが見える。そつと反対の腕で、腕についた気泡をなぞると、さあつと気泡は水面に上がりていき消える。これが面白く、湯に一番に浸から

せてもらうのが好きだった。

静寂と祖母があかすりタオルで石鹼を泡立てる音。シャリシャリ擦る音につられて目をやると、祖母はさつさつと、身体を洗っている。

沈黙を持て余して、またさつきのアニメの話題を持ち出す。

「もし、火のモンスターがいたら、お風呂早く沸くかな？」

「んー？ どうだろうねえ。そりだつたら便利だろうね」

祖母は首を洗いながら答えてくれる。風呂場の壁を眺めている目は、真智からはとても優しく、しかし涼しく見えた。滑らかに動かしていた手がガツンと止まる。

「痛つ」

金のネックレスにあかすりタオルが引っかかり、ネックレスに胸のイボが引っ張られたのだ。

よほど痛かったのか、しばらく祖母は胸を押さえてうずくまる。

「……大丈夫？」

いつもちやきちやき動く祖母が、痛がる姿は珍しく、心配になつて声をかける。

「大丈夫。ちよつとネックレスがイボに引っかかっちゃつて」

一呼吸置いて、胸のイボを軽く擦りながら恥ずかしそうな笑顔をこちらに向ける。

泡を流して、静かに祖母も湯船に入った。真智の真向かいに白い乳房と、金色のネックレス、そして紫茶のイボがある。

二連のネックレスは一連目がやや長く、イボの外側にかかり、二連目はそれよりも短くイボの上に曲線を描いていた。どちらもチエーンネックレスで、短いネックレスの方が細かいチエーンになっている。

風呂に入る時でさえ、祖母はネックレスを外さない。よほど大切なもののなのだろうか。それともお気に入りなのだろうか。

「それお風呂のときも外さないの？」

胸元のネックレスを指さすと、祖母は不意を突かれたよう

に、困ったように笑った。節だつた指でネックレスを回し、留め具部分を見せてくれた。

「いちいち外すの面倒くさくてね。目も悪いし、指もうまく動かないし。あとなんか絡まつててね」

見れば留め具部分には、何種類かの服の繊維がカラフルに絡まりついていた。

軽く真智が爪で引っ張つてみたが、繊維同士と金の鎖が絡まり合い、ハサミなどで切らなければ取れそうもなかつた。

「それ、宝物なの？」

「そうだよ、これは本物の金だよ」

微かに揺れる水面にネックレスを持ち上げながら、鼻歌で

も歌うように祖母は答えた。

「長い方は、真智ちゃんのおじいちゃんからもらつたので、短い方は別の人にもらつたの。こっちの方が安いのね。真智ちゃんが大きくなつたら、あげようね」

本物の金だと言うが、真智にとつては飾り気のない金色の

ただの鎖にしか思えなかつた。もつと花やハートや星だの、可愛い飾りのあるネックレスならよかつた。それに、テレビで見たことのある金の方々がキラキラ光つていた気がする。それに比べて目の前のネックレスはくすんでいるように見えた。

だが、得意そうな顔でネックレスを見せている祖母に「いらない」とは言えなかつたので、ただ黙つて見ていた。ネックレスは結局、真智が中学に入る前に貴金属の買い取りに出されて、真智の手には入らなかつた。ネックレスのことなどどうでもよかつたが、祖母はしばらく落ち込んでいたと思う。

ふと、胸元のイボに視線がいった。

「まだ痛い？」

真智はそつと紫茶のイボの上に指を当ててみる。表面はザラザラしていて楕円で、根元は少しグラグラしている。

「もう大丈夫だよ、痛くない」

気持ちよさそうに祖母は湯船に寄りかかり、天井を見つめている。湯気が天井まで昇つて集まつて、水滴になつて今に

も落ちてきそうだ。

「これなあに？ 病気？」

「これはイボ。病気じやないよ」

コリコリと触る祖母の指は、長めの爪が生えていて美しく指を揃えていた。なんだか目立つ節まで美しく見えた。

「なんでききたの？」

真っ白い肌は柔らかく、やはり美しいと真智は思っていた。

だからこそ、そこに一点乗つたイボが汚らしく、恐ろしく思えた。もしかしたら自分の肌にも生えてくるのではないかと、どこかで思つてしたりもする。

「今日はお風呂入るのやめようかね」

「いつだつたかな。気づいたらできてたね。年だからしあうがないよ」

どこかさみしく、揺れる水面のように祖母は笑つた。白い湯気がその笑顔を隠していく。

ぱちやん。天井から水滴が一滴落ちて、水面に大きな波紋

を作つた。温かい湯の中にいると、だんだん頭が心地よくぼ

うつとしてくる。

「せつないねえ」

祖母の小さな声が反響して聞こえた気がした。当時の真智には「せつない」という言葉の意味がわからなかつた。真智が不思議そうな顔をして見つめているのに気づいたのだろう。

「昔はよかつたなつて、ね」

祖母は恥ずかしそうに、どこか遠くを見ているように答えた。なおも不思議そうな顔をしている真智の頭を撫でた。

かう姿は、記憶の中の祖母とは懸け離れていて、他人のよう
に感じてしまう。

着替えは用意しておかない。拭き残した水滴を背中や脚に
付けたままタンスを開けて着替えを漁る。せつかく畳んで入
れた肌着はぐちやぐちやになつて引き出しに収まらなくなつ
た。

真智が大学二年の春、祖母は庭先で転んで脚を折つた。温
かい春雨が柔らかい草木の芽を濡らす季節だった。すでに足
腰が弱つていたのかもしれない。踏み石が雨に濡れており、
滑つたのだ。八十歳になつてからも、やや認知症は入つてい
るが、健康のためと歩いていた祖母は、この日も一人で散歩
がてら買い物に行こうとしていた。

しばらく唸りながら自力で立ち上がるうとしたが無理だつ
たらしく、大声で台所にいる真智の母を呼んだ。静かに降る
雨の中、祖母の声を聞き、駆けつけたとき、祖母は泥と草の
汁で手のひらを汚しながら、まだ自力で立とうとしていたら

しい。

たまたま休みだつた父が車で近くの病院に連れて行つた。
診察では捻挫と言われた。本人もかなり痛がるので、しばらく
く安静ということで一、三日自宅のベッドで過ごすことにな
つた。

湿布を貼つて様子を見ていたが、なかなか良くならない。

それどころかかなり痛がるので、隣町の大きな総合病院に連
れて行き、診てもらつたところ、骨折との診断が下つたのだ。

年をとつてからの怪我は治りが悪いとはよく言つたもので、
また脚から衰えていくのも本当だつたようだ。歩けなくなつ
てから祖母の手脚は痩せ細つていつた。痩せ細る手脚に比べ
て、なぜか腹だけは不自然に出てきた。元々下半身の肉付き
がいい方だつたが、不健康にぽつこりと下腹が出ているのだ。
動けなくなつたため、便通も鈍くなり、腸が詰まつているの
も原因の一つと考えられた。

脚を怪我して寝たきりになつてからは、お風呂はヘルパーさんが来てくれる日以外は、ウェットタオルで身体を拭いてやる。父と母と真智が交代でやることになった。祖母は大人しくされるままに拭かれる。父は「痛くないか？ 気持ち悪いところはないか？」と声をかけながら拭くが、力が強いためか、祖母は「大丈夫」と言いながら少し顔をしかめているよう見えた。

母が拭くときは、祖母は一番大人しい。息子の妻は他人と いう心情なのか、恥ずかしいのだろう。ただ黙つて部屋の何もない空間を見ている。そして終わつたら「ありがとう」と 静かに言うのだ。

真智が拭く日はよく喋ると思う。背中が痒いとか、オムツが気持ち悪いとか言つてくる。ベッドから出られないのはかわいそうだし、昔は身体を洗つてもらつたなと思いながら、背中を念入りに拭いてやつたり、濡れてもいない替えたばかりのオムツを替えてやつたりする。

大判の介護用ボディタオルは安くはない。正確にいえば安いものもあるが、安いものはすぐ破れたり、乾燥してしまつたりと、それなりの理由がある。真智の家では、拭きやすい大判を選んでいる。時々はお湯で濡らしたタオルで拭いたりもするが、ボディタオルの方が使つた後はすぐ捨てられることを考えると、ウェットシートタイプのボディタオルの使用が多くなる。

真智は一生懸命祖母の身体を拭く。ぽつこりと膨らんだ腹は、真っ白いまだつたが、臍の中には、臍ゴマがガチガチに固まつたものが、小石のように入つていた。真智には、白く粉をふいているそれを取り出す勇気はなかつた。

両乳房は幼いとき見たそれより、しづんざ果実のようになら下がつていた。乳房の下も拭き、谷間を拭いて上に上がると、見慣れた黒い点と出会う。イボは昔からの大きさと色のままで、同じ場所にあつた。他の場所はしおれているのに、イボには張りがあつた。まるでこのイボが祖母の生命力を吸

い上げているかのようだつた。

ボディタオルが引つかからないように、イボの周りも丁寧に拭く。

「痛くない？」

皮膚に変色した、隆起した部分があるのだ。触れるとき、

心配になつて聞いてしまう。

「大丈夫だよ、気持ちいいよ」

祖母は目を閉じたまま答える。

首の皮は弛み、重力に逆らえず垂れ下がつてゐる。前は肉付きがよかつたせいか、年の割に張りのある肌だつたが、今は弛んで皺が増えた。

脇、腕と拭いていく。こちらも首と同じで皺だらけだ。気

がつかなかつたがシミも多い。何より記憶の中では真っ白だ

茶色がかつてゐる。まるで枯れ木だつた。

手の先に生えている爪も茶色く、縦筋が入つて伸び放題だ

つた。人さし指の爪にご飯粒が挟まつてゐた。それも綺麗にしてやつた。

昔は洗つてもらう側だつた真智が、今度は祖母を綺麗にしている。懐かしさと悲しさが仲違いしている。なんともいえない気持ちだ。

三日に一回しか風呂に入つていなかつたときよりは臭わなかつたが、やはりヘルパーさんが来る入浴前は、すえた臭いが鼻腔をつく。この臭いは祖母の部屋を離れた後もしばらく付き纏うように鼻腔の中を漂う。リビングでごはんを食べていても、自分の部屋で本を読んでいても、ふと気づいたときにその臭いがする瞬間がある。まるで祖母がすぐそばにいるような気になつた。

一年程前、祖母が庭先で転んだ頃だらうか。

真智の胸、乳房の間の上あたりに小さなニキビが一粒できつた手脚や首は、血行が悪いのか、内臓のどこかが悪いのか

手の先に生えている爪も茶色く、縦筋が入つて伸び放題だ

ニキビとは違い、膿が出たりしなかつたが、なかなか治らなかつた。それどころかだんだん硬くなつていき、気づいた頃には平たい小豆くらいのイボとなつていた。

祖母と同じ場所に同じくらいの大きさのイボができるなんて、一瞬は遺伝子の神秘に感心したが、今まで何もなかつた白い肌に現れた異物にショックを受けた。ホクロなどは真智にもあつたが、それとイボとは話がちがう。腰や笑窪ら邊にある小さなホクロは美しいとか可愛いとか感じるが、表面がザラザラした紫がかつた茶色の、少し盛り上がつたイボは到底美しいとは思えなかつた。

皮膚科に行けば、レーザーやドライアイスなどで取つてもらえるとネットで調べたらわかつたが、大学をはじめとした日常の用事の間に通院するのは面倒にも思えた。また、治療にかかる金額は、大学生の真智には痛かつた。両親に相談して出してもらうという手もあつたが、自分でなんとかしろと断られると勝手に諦めている節が真智にはあつた。

なるべく気にしないように、そのうち病院で取つてもらおうと、着替えや風呂のとき以外はほぼ忘れて生活していた。

だが、部屋着で着てている襟首の広がつたTシャツを着替えるとき、そのイボに引つかかつてしまつたことがあつた。じんわりとイボの周りに血が滲んだ。どこか切れたらしかつた。しばらくティッシュで押さえていると、血は止まつた。ティッシュの下には何事もなかつたように紫がかつた茶色のイボがそこにあつた。

また、風呂で身体を洗つているとき、あかすりタオルが引つかかつたこともあつた。風呂から出てティッシュで押さえると、わずかに血がついたがすぐ止まつた。

また何かの拍子に爪を引っかけたり、衣服を引っかけたりしているうちに、イボの根元は不安定にグラグラとしだした。

そしてある夜、ふと、祖母が風呂場でネックレスを胸のイボに引っかけたことを思い出した。そしてどこかで、イボの根元を糸できつく縛ることで取れるという記事を

見たのを思い出した。

好奇心もあった。本当に取れるのかという好奇心、取れたイボの断面はどんなのだろう、そして、取るときに痛みは生じるのか、自分は痛みに耐えられるのかという好奇心。無自觉な好奇心が沸々と真智の中で湧き上がった。

深夜〇時、母親の裁縫箱からそつと糸を押借した。細くて強い方がいいだろうと、白いミシン糸を一メートルほど切って持ち出した。小さなイボを括るだけだが、何周するかわからぬし、失敗したときのため、余裕をもつた分量にした。イボを強く縛ることで壊死させるということだったので、血はそんなに出ないだろうと思い、念のための絆創膏と消毒液を用意した。

何回か引っかけてグラグラとなつた根元を見ると、皮膚に繫がっている部分は数ミリしかないようだつた。そつと糸を一周巻き付けた。ゆっくり引き締めていく。いつ痛みが襲うかドキドキしたが、ぐつと締めたが思ったような痛みはなか

つた。ただ糸で縛られているという感覚しかなかつた。もつと力のかぎり締めることもできたが、糸が肉片を切断するイメージが脳をよぎり、恐くなつたのでやめた。同じくらいの強さでもう一、三周巻き付けた。何かあるといけないので、すぐほどけるように蝶結びをした。

そのまま十分ほど置いた。見た目は何も変わっていない。触つても何も変わつていない。蝶結びを解いて、もう少し強く締めて結び直した。

そのまま十分くらい置き、様子を見て、また強く縛り直すのを繰り返した。そのまま置いておいてもいいものを、暇つぶしに読んでいた本の内容も入つてこず、十分くらいで様子をみてしまうのだ。三十分くらいすると、ややイボは紫みを増した気もしたが触つた感覺的には何も変わつていないうだつた。

そこで、この糸はどのくらいの時間巻き付けておかなければいけないのかという疑問に思い至つた。細い糸とはいえ、

そんな長い間巻き付けてはおけない。何も考えずに実行した自分の浅はかさに呆れた。

短い間考えた結果、真智は自分の机からカッターナイフを取り出した。普段、紙などを切るのに使っているカッターだ。糸を巻き付けたとき、痛みがなかつたため、皮膚に繫がつているわずかな芯さえ切つてしまえばなんとかなると思ったのだ。皮膚についているのは数ミリ。切つたとして、転んだときの擦り傷や、包丁で指先を切つたときの切り傷と同じくらい、なんならそれより小さい傷かもしれない。だとすれば用意した絆創膏で十分保護できるだろう。

なるべく血を止めておいた方がいいだろうと、もう少し糸を締めたままおいておくことにした。

午前一時十五分、作戦を決行する。イボの表面は少し硬くなつたように感じる。またグラグラとより不安定になつている気もする。

カッターの刃先を除菌シートで拭く。さすがにバイ菌が傷

に入るのは恐ろしい。そんなに使つていなかッターナイフは鈍く銀色に光つていて。

「自傷行為」。そんな言葉が頭をよぎる。だが、すぐに頭を振る。これはイボを取るため。決していたずらに自分を傷つけるためではない。邪魔なイボを取り去るための行為なのだ。多少傷跡は残るかもしれないが、よく見なければわからない程度だろう。二十代の治癒能力を信じている。

カッターを使う前に糸を解いておく。グラグラの根元に消毒液をかけ、カッターの刃を根元に当てる。血が止まつてゐるであろう間に切つてしまわなければ。机の上に乗せた小さな卓上鏡を、身を乗り出して覗く。さすがに刃物を自分の一部に当てるに緊張する。素早く切れば痛くないだろうか。躊躇しているとき、ふと歯を食いしばつてゐる自分がいた。一度、カッターを置いて、ふうっと息を吐く。

思い出したように、タンスの引き出しを開けてピンクのタオルハンカチを取り出す。普段使い用の肌触りのいい清潔な

ハンカチを、真智は口にくわえた。テレビドラマや映画で、痛みを我慢するとき、舌を噛まないよう布を噛んでいるのを観たことがある。初めてだが、それを見様見真似としてみた。上下の歯の間に柔らかいハンカチが入るだけで、だいぶ頸の負担が減り、自然に力が抜ける気がした。

鼻から再び息を吐き、今度はカッターの刃をぐつと動かした。

思つたより痛くない！ だが、思つたより切れない！

ティッシュで剥がれかけのイボを摘みつつ、剥ぎ取るようカッターを動かしていく。ぐつぐつと三回くらいに分けて切つた。呼吸を忘れないように、意識して息を吐いて吸つた。

最後は一気に奥に刃を押し出すと、イボはぶつりと取れた。血は思つたより出なかつた。糸で縛つていたのが効いたのか。かさぶたを無理に剥がしたときのように、じんわりと丸く血が出てきて、赤くぶつくりと盛り上がつた。新しいティッシュでちよんちよんと血を拭い、絆創膏を二枚、十字に重ねて

貼つた。ガーゼ部分に赤黒い丸が透けて見えるが、染みてはこない。痛みもない。

摘んでいたティッシュをそつと広げると、平たい三、四ミリの茶色の物体があつた。じつと観察すると、自分の目が顕微鏡になつたように、だんだん表面が近く見えてくる。ぶつぶつとした塊。肌の何が集まつてできているのか。長く見ているとなんだか気持ち悪くなつてくる。だが反対に自分の肌から切り離されたこれは、どんな感触なのか。また好奇心が湧いてきた。

指でつついてみる。ティッシュの上に乗つていてるからか、肌についていたときよりフニャフニヤと頬りない。裏返してみると、同じ色だが表よりぶつぶつは少ない。イボの部分だけが綺麗に取れたようだ。顔を近づけてしばらく眺めていたが、茶色いぶつぶつが指先から全身を埋め尽くすような、ゾワゾワした感覚が一瞬駆け抜けた気がした。気持ち悪くなつたので、ティッシュで丸めてゴミ箱に捨てた。変な汁などが

ついていたら困るので、手もよく洗った。

片付け終わると爽やかな気分になつた。夜中二時近いとい
うのに、目が冴えている。興奮しているのだろうか。寝る前
に再び卓上鏡を覗く。絆創膏の下に、あの邪魔なイボがない
と思うと晴れ晴れしい気持ちになる。しばらくは絆創膏を貼
つておかなければいけないが、元通りの白い肌に戻るのが楽
しみだ。真智は爽やかな気持ちのまま布団に入った。

三日もすると、薄皮が張り、絆創膏も取れた。そして気づ
かぬうちに元の白い滑らかな肌になつた。そして真智は自分
にイボがあつたことなど忘れていつたのだ。

天気のいい冬の午後、祖母はぼんやりテレビを観ていた。

いや、テレビから垂れ流されるバラエティ番組の再放送は誰
も観ていなかつたのかもしれない。昼食のおにぎりを食べ終
わつた頃かと、真智は祖母の部屋を訪れた。割れないプラス
チック皿は空になつており、二個出したおにぎりは食べ終わ

つていた。

「ちゃんと食べられたね」

皿を回収してさつさと立ち去ろうとした。

「オムツは大丈夫そう?」

ここで大丈夫と言つてくれれば、早々に戻れるなと心のど
こかで考えながら、祖母の顔を覗く。

相変わらずぼうつと一点を見つめていたようだつたが、問
いかけにはつとしたのか真智と目を合わせる。

「あ、ああ。大丈夫だよ」

今日はなんだか調子が良さそうだ。そんなとき、ホツとす
るのも真智の本心だつた。

「真智ちゃん、棚からブラシとつて」

棚には祖母のヘアブラシの他にも、痒み止めや昔使つてい
た椿油などが置いてある。窓から差し込む西日に当たつて、
椿油の瓶は暖色に輝いているように見えた。中身はほとんど
揮発してしまい、酸化した油の臭いがした。

ずっと枕に押し付けられているせいで祖母の柔らかい髪は

潰れて薄くなつていった。昔は定期的にかけていたパーマも

伸びっぱなしになつていた。白髪染めも無論しなくなつたので、ペタンコになつた白髪から透けて頭皮が見えてしまつて

いる。本人は気にしているのかしていないのか、最近は髪も

梳かさず、たまにポリポリと頭を搔いているだけだつた。

痒いのかとドライシャンプーをしようともしたが、面倒くさいと、本人が言うので家族の負担をわざわざ増やさなくてもよいかと、ヘルパーさんが来るまで頭髪については放置していた。

真智も、枯れ木についた枯れ葉のように、触れれば落ちていく抜け毛をわざわざ増やしたくはなかつた。

ヘアブラシを取つてやると祖母は髪を梳かそうとした。

「ちょっと待つて、身体起こしてあげる」

背中に枕を挟んでやる。少なくなつた髪を祖母は丁寧に梳かす。まるで昔の祖母のように。

「椿油なかつたっけ？」

「もう少ししかないと思う」

本人が満足すればと、棚から椿油の瓶も取つて渡す。椿油は家族の誰も使つていないので、瓶にあるだけしかない。

祖母は、瓶を何度も振つて残つた少ない油を手のひらに出

そうとしている。貴重な数滴は皺だらけの手のひらで吸収されてしまうのではないかと思うほどわずかだつたが、それを

大切に祖母は髪につけた。白髪とまだ色のついた赤茶の髪が西日に輝いた。酸化した油の臭いとすえた老人の臭い、埃の臭いが混じつて不思議な気持ちになる。懐かしいような、嫌

なような、大切なようなものが混在する空間のにおいだつた。

パーマの伸びた髪の祖母はなんだかしつくりこない。梳か

して整えた髪型も自分の祖母ではないようと思えた。

「真智ちゃん、そこの引き出しからアルバム取つてちようだ

い。青い表紙の」

指さされた戸棚の引き出しを開けると、古めかしい陶器の

ブローチやイヤリング、真智が小さい時にあげたビーズで作つたブレスレットや折り紙の花などと一緒に青い表紙のアルバムが一冊入つていた。青い表紙と言つても、古いものらしく茶色がかつている。台紙もやはり茶色くなっている。

祖母に渡すと懐かしそうにページを開いた。

「おばあちゃんの子供の頃は写真なんてなかつたからね、そ

れに戦争もあつて大変だつたから、このアルバムにあるのは、お父さんが産まれてからの写真」

そう言つて真智に、はじめの写真から一枚ずつ解説を始め

る。

しまつたと思った。これは思つたより長引きそうになつてしまつた。部屋を出るタイミングを逃してしまつた。だが、久しぶりに楽しそうに話す祖母の姿を見ると、話を遮つて途中で部屋を出していく氣にもならなかつた。

「これはお父さんが小学校に入ったとき、写真つて言つたら

緊張した顔になつて。こつちは真智の叔母ちやんだね。産ま

れて一週間とかそこらの。こんなに昔は小さくて」

しばらく祖母が母親だつたときの話を続いた。写真を見つめ祖母の話を聞き、また意識の半分は始まつたばかりのやはり再放送の刑事ドラマへと向いていた。祖母にバレないようになつて、時々相槌を打つのは忘れない。

「これはみんなで海に行つたときのだ」

祖母が指さした写真は褪色してセピア色になつていた。祖母と海水パンツ姿の八歳くらいの父、ボーダー模様の帽子とお揃いの水着を着た三歳くらいの叔母が映つていた。波打ち際で、母親である祖母の足元にお尻をべたんとつけて座つている叔母は、陽射しが眩しいのか眉間に皺を寄せた表情で写つていて。反対に父は右腕を頭の上で曲げ、左腕を腹の辺りに持つてきている、いわゆる「シェーポーズ」をしていた。

いかにも元気いっぱいな、いたずら盛りという印象を受ける少年だ。

そしてその写真の中央には、若かりし頃の祖母が二人の子

供を優しい目で見つめている。娘と同じボーダー模様のワンピース水着からは、スラリとした白い脚が伸びていた。セピア色の写真からは水着などの色はわからないが、祖母の肌が白いのはわかった。日に焼けた少年の父が横にいるので一層その白さが際立った。

祖母の髪はふわふわの巻き毛が肩まであり、昔の外国の映画の女優のようだった。

「おばあちゃんの髪、映画の女優さんみたいで素敵ね」

真智は思つた感想を素直に伝えた。祖母は嬉しそうに弾んだ声で、写真の自分の髪を指しながら応えた。

「でしよう。おばあちゃんは流行の最先端だったから、パー

マもこの辺だと一番最初にあてたんだよ。それに髪も茶色に

染めてたんだ」

言われてよく見れば、セピア色でわからなかつたが、少年の父の海水パンツが黒だとすると祖母の髪はそれよりもやや薄い色に見えた。

「スタイルもいいでしょ？」

また得意そうに祖母は言った。

水着の胸元は曲線を描いていて、胸の谷間が少しのぞいていた。そこには見慣れたイボは映つていなかつた。そのことは触れず、写真に目を落としたまま真智は答える。

「うん、とっても綺麗」

素直な感想を伝えると、祖母もまた嬉しそうに微笑んでくれると思つた。だが、ちがつた。

弾んだ声が返つてくるかと思つたが、長い沈黙が続いた。どうしたのかと祖母の顔をちらつと見ると、眉間に皺を寄せて険しい顔をしていた。どこか痛いのだろうか。

「あ、こつちはお父さんとお母さんの結婚式の？」

止まつたような空気に耐えられず、真智の方から次の写真を指さす。こちらは、カラー写真だ。袖の膨らんだウェディングドレスを着た母と、タキシード姿の父、そして黒留袖の祖母が写つていた。海の写真ではふんわりとした髪を下ろし

ていたが、こちらでは後ろでまとめられている。五十代のはずだが、着物から伸びる首、ふつくらとした赤い唇は艶っぽかつた。

「うん、うん。真智ちゃんのお母さん、綺麗だね」

「おばあちゃんも綺麗だよ」

「かわいかつたなあ」

褒めたつもりだったのに、祖母はまた沈んだ表情になつた。震える手で祖母はページをめくつた。次のページからは、赤

ちゃんや幼稚園のときの真智も写つていた。

急に恥ずかしくなつて、さりげなく祖母の手を搔い潜り、次のページをめくろうとした。

「ほら、真智ちゃん、かわいい！」

一際元気になつて、祖母が一枚の写真を指さす。真智の小

学校の入学式だった。校門の前の「入学式」と書かれた立て

看板の前で、祖母と二人で撮つたものだ。父と母も一緒にい

たのだが、一番真智の面倒を見てくれている祖母と二人で、

最初の一枚は撮ろうということになつたのだ。祖母は白黒の

千鳥格子のツーピース、真智はピンクのワンピースにセットジャケットを着ている。胸に「入学おめでとう」と書かれた札のついた可愛い花のコサージュを付けてもらつたのを覚えている。

一人の世界に入つたように、祖母は背を曲げて写真を覗き込んでいる。

「おばあちゃん？」

再び沈黙した祖母が心配になり声をかける。祖母はしばらくなつていていたが、絞り出すような声で言つた。

「せつないねえ」

また「せつない」だった。急な感情の変化に真智は少し恐くなつた。

「せつないねえ。昔はこんなに綺麗だったのにねえ」

祖母は皺だらけの茶色い枯れ木のような両腕を見つめながら「せつないねえ」を繰り返している。俯いた頭のつむじは

毛が寝て、地肌がよく見えた。ずっと見てきたふわふわの巻き毛はもうない。

「せつないよお」

しまいに祖母は布団に顔を伏せ、泣き声のような声をあげた。真智はどうしていいかわからず、そつと祖母の背中に手を当てる。寝汗のかしつとりとパジャマは湿っていた。鼻腔をあの臭いがついた。

「大丈夫？」

真智の問いかけには答えず、「せつない」「昔はよかつた」

を繰り返し、泣いているようになつていて。まるで劇のようになつていて、悲しんでいる祖母を、だんだん冷ややかな目で見ていて、真智がいた。真智もそんな自分に気づいた。

「またあとで来るね」

真智は聞いているのかわからない祖母の耳元で伝えると、空の皿を持つて台所に降りた。

祖母の部屋のテレビはつけたままにしておいた。落ち着い

た祖母がさみしくないように、またわざとらしい泣き声を消してくれるようになつた。

ドラマの再放送も終わり、夕方のニュースが始まる時間だつた。

日々が過ぎるにつれ、大人しく無気力になつていつた祖母だが、元気な日は、と言つても身体は動かないのだが、気持ちが追いついていないのか、混乱しているのか、ひどくわがままを言つた。

ごはんが箸でうまく食べられない。スプーンもうまく持てない。食べさせてくれなければ食べられない。などと喚き散らした。普段の祖母では考えられない言動に、父も母も困つてしまつた。

「母さん、みんなそんなに暇じゃないし、手は動かせるんだから自分で食べてよ」

優しく父が諭すが、不貞腐れたのか、祖母は箸もスプーン

も置いて、黙つて窓の外を見ている。父と母は互いに顔を見合させている。

このやり取りを部屋の外から見ていた真智は、両親の横をすり抜け、祖母の食事の乗つたお盆を手に取つた。

「ちょっと待つてて」

台所で真智は、お茶碗に入ったごはんをボールに移した。

今日の祖母の昼食は、鶏の照り焼きだつた。六等分に切られた鶏肉を、食べやすいように一口大にキッチンバサミで切る。ボールのごはんに混ぜ込み、おにぎりにしていく。ラップを使おうとしたが、昔祖母が握つてくれたまん丸おにぎりを思い出しながら、手で握つた。鶏の照り焼きの油が手についてぬるぬるして気持ち悪かつた。おにぎりを皿に乗せ、石鹼で手を洗う。一回では油が取れず、二回洗つた。

おにぎりを乗せたお盆を持つて、祖母の部屋に戻ると、祖母はまだ外を黙つて眺めていた。母はいなかつたが、父は部屋にいてつけっぱなしのテレビを眺めていた。真智の持つて

きたおにぎりを見て、驚いた顔をしたが、感心した笑みをこぼした。

「おばあちゃん、おにぎりにしてきたよ」

「母さん、真智が握つてくれたよ。よかつたね」

祖母はゆっくりお盆の上を見たが、またすぐ顔を背けてしまつた。

「いらない」

「これなら手で食べられるよ。おかげも混ぜてあるから、これだけ食べればいいよ」

真智はおにぎりを一つ持つて祖母に差し出した。

「いらないよ、こんなの。こんなにぐちやぐちやにしちやつて、食べられないじやない」

やつとこちらを向いた祖母は、低い声でぼそつと言つた。

真智は返す言葉もなかつた。喉の辺りまで熱い衝動がこみ上げてきたが、きっとそのまま口から出してしまえば、ひどい暴言になつてしまふのはわかつていた。だからぐつと息を

止めるように肩に力を入れて、黙っていた。目に涙が溜まつてきた。

「母さん！ 真智がせっかく作ってくれたのに」

父が祖母に強い口調で注意したが、祖母はまた窓の方を見ている。

涙が落ちる前に真智は部屋を飛び出した。おにぎりを触った手が油で気持ち悪かった。手を洗わなくてはいけない。

夕食前に、台所に入ったとき、ゴミ箱に鶏肉の混じったおにぎりが捨てられているのを見つけたが、真智はそのときには、他人事のように、結局食べなかつたんだなと思うだけだつた。ゴミ箱に捨てられたそれは、汚いごみになつてしまつたのだ。

脚を折つてから一年半ほど、秋風が庭の木々の葉を吹き集める季節、祖母は亡くなつた。

最期の方はまるつきり理屈のわからぬ幼子のように、愚図

つて大声を出すことも多かつた。真智も両親も、脚を怪我して動けない祖母に対する憐れみや、世話になつた祖母に対する恩などよりも、ただ疲れた、という感情だけが大きくなつていつた。祖母の葬式が終わつた今は、悲しみよりも安堵という思いが先立つた。

真智も出棺のとき、一度泣いただけで、祖母のいない日常へと戻つていつた。

風呂場のすりガラス戸を開けると、脱衣場に湯気が流れ込んで洗面台の鏡が一気に曇つた。真智は乾燥機でふわふわに仕上げたバスタオルを掴み、傍らの少女の身体を優しく包んだ。透けるような白い肌は、強く扱えればすぐ傷んでしまう桃の実のようだ。擦り過ぎればタオルの纖維でさえ、傷がつきそうにも思えた。だが、ちゃんと拭かなくては大事な娘が風邪をひいてしまう。

真智の一人娘である明莉^{あかり}は五歳になる。最近はなんでも一

人でやりたがるが、まだまだ危なつかしい場面の方が多い。

「あとは自分で拭く！」

こんな感じだ。背中は拭いてやつたので、手の届く範囲は拭けるだろうとタオルを渡す。一昨日は脚に水滴を付けたままで下着を履こうとしていたが、今日は忘れずに拭けた。そんな子供の成長の早さに感心しつつ、さびしさも感じてしまう。全身を拭けたところで、手早くボディミルクを塗つてやる。ベタつくと明莉は嫌がるが、乾燥肌のため保湿を怠るとすぐあかぎれのようになつてしまふ。

肌着を着せ、パジャマを着せる。お気に入りのキャラクター

ーが胸に描かれているピンクのパジャマは明莉のお気に入りだ。

嬉しそうにはにかむ口元から、白い小さな乳歯が見える。

少し前に上の前歯が一本抜けて隙間が空いている。その笑顔が愛おしい。真っ赤に上気した柔らかい頬を両手で包み込む。真智も明莉も同じ笑顔になる。

「あとは、パパにドライヤーしてもらつておいで」

明莉の髪は暖かいリビングで乾かす。ドライヤーをしている間の暇が待てない明莉を退屈させないため、テレビで好きなアニメを見せながら髪を乾かす。真剣に観ていて、じつと大人しくしているが、耳の周りの毛を乾かすとき、ドライヤーの音がうるさいと文句を言われる。と、夫がよく言つてゐる。すぐ遊び出す明莉を、風邪を引かせないために湯上がりは流れ作業である。服を着せるまでは真智の仕事、髪を乾かすのは夫の仕事と、なんとなく決まつていた。

「真智はゆっくり保湿してて」

明莉を連れていきながら夫が小声で囁く。五年前に結婚した三つ年上の夫は、気が利くし、娘の面倒もちゃんと見ててくれる。そういうところが好きで、結婚の決め手だつた。

明莉の乾燥肌は真智ゆずりである。三十歳になつてからは特に乾燥がひどい氣がする。化粧水を全身に塗つてからボディミルクを塗るほどだ。明莉のボディミルクとは別のボディ

ミルクを棚から取り出し、丁寧に塗つていく。薔薇の甘い香りが脱衣所に広がつた。

換気扇を回しているため、徐々に洗面台の鏡の曇りがとれていく。見慣れた顔と身体が映る。最近少し肉付きがよくなつた輪郭は、風呂上がりは浮腫みがとれるのか、ややすつきした印象になる。血管が透けて青く見えるほど白い肌は昔からの自慢だ。日焼け止めや保湿などのケアは欠かせない。

細い指先でマッサージをしながら保湿をしていく。指先の爪は綺麗に整えられツヤツヤとしたトップコートが塗られている。

セミロングの黒髪をまとめたうなじにも塗る。上気した肌は微かに薔薇色に染まっている。でも真智がもし画家だったら、自画像は細い線で描くだろう。陶器のように冷たい白色で肌を塗る。白い肌こそが美しい。

細い鎖骨に滑らかに指を滑らす。くるくると優しくマッサージしていく。左から右へと指を滑らせたとき。

「あら、何かしら」

胸の鎖骨と鎖骨の間、何か違和感があつた。滑らかな肌の上に一点小さな隆起があつた。少し赤みもある。

「ニキビ？ 毛穴詰まりかしら？」

軽く指でなぞりながらなんだか嫌な予感する。湯気はとつぐに消え、鏡には冷えた真っ白な身体が妙にはつきりとした輪郭で映つていた。

青年文学賞

今回ご応募いただきました多くの作品の中でも、惜しくも最終審査において入賞を逸した作品名を紹介し、
今後の執筆に期待いたします。

清潔な愛

赤庭 ヨガネ

付着

檜原 雅之

光をうむ手

風待 葵

ドクダミの花

天野 周

三十分の眠り

長船 悟

聖なる君は人の子

谷 紀之

松茸とグスコーブドリ

管 和輝

足搔いて、愛

畔上 朋丈

不在着信

後藤 恵

第十九回 「舟橋聖一文学賞」について

趣 旨

彦根市民が豊かな心を育み、彦根市に香り高い文化を築くため、舟橋聖一文学賞を制定し、彦根市名誉市民である舟橋聖一文学の世界に通ずる優れた文芸作品に対し、賞を授与するものです。

四 賞

正賞 賞状および額入り舟橋聖一胸像
副賞 金 二十五万円

五 発表期日

令和七年十一月～十二月（報道関係に発表する。）

六 授賞式

令和七年十二月（予定）

一 設置者

彦根市

二 選考委員

佐藤 洋二郎（作家）
藤沢 周（作家）
増田 みづ子（作家）
富岡 幸一郎（文芸評論家）

三 授賞対象作品

作品の種別は小説で、六月一日を基準日とし、おおむね同日前一年間に刊行された単行本であること。

第三十七回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」作品募集要綱

趣旨

作家・故舟橋聖一氏は、井伊直弼公を題材にした小説『花の生涯』を執筆し、それが後に映画や演劇となり、また第一回のNHK大河ドラマとして放映されたことで、直弼公と彦根市の名が全国に知られるようになります。そのため、本市では、このような多大なる功績をたたえ、同氏を彦根市名誉市民第一号にするとともに、広く青少年の文学奨励をはじめ、教育・文学の振興を図るため、同氏を顕彰する文学賞として、平成元年度から文学の登竜門となる「青年文学賞」を設けました。

今年度も下記のとおり全国の青年各位から優れた作品を公募します。

一 設置者

二 選考委員

佐藤 洋二郎（作家）
藤沢 周（作家）
増田 みづ子（作家）
富岡 幸一郎（文芸評論家）

三 応募要領

(1) 応募作品

小説・随筆・戯曲・評論

※同一作品部門の応募は、一人一編に限る。

(2) 応募規定

四〇〇字詰め原稿用紙五〇枚以内（随筆については、一〇枚以内でも可）で縦書きとする。

（ワープロ原稿の場合は、A4サイズ横・一行四〇字×二五行で縦に印字し、四〇〇字詰め換算枚数を明記する。）自作未発表のものに限る。生成A-Iの使用は不可とする。

※郵送または持参による提出の場合、応募作品には、指定の応募票を記入および添付すること。

(3) 応募資格

令和七年九月一日現在、満十三歳以上満三十歳以下（平成六年九月一日から平成二十四年九月一日までに生まれた人）

ただし、今まで入賞した作品部門での応募はできない（佳作を除く）。

(4) 応募期間

令和七年六月一日（日）～九月一日（月）
(郵送の場合は、当日消印有効)

(5) 提出先

〒522-1000

滋賀県彦根市尾末町八番一号

彦根市立図書館内「舟橋聖一記念文庫」事務局

(℡) 0749-2310649

(6) 提出方法

以下の①～③のいずれかの方法による提出とする。

- ①インターネット（彦根市電子申請サービス）
- ②郵送（封筒の表には「青年文学賞応募作品在中」と朱書すること。）
- ③持参（封筒の表には「青年文学賞応募作品在中」と朱書すること。）

(7) その他

- ※応募作品は、一切返却しない。
- ※入賞作品の著作権は、彦根市に帰属する。
- ※最終選考に残った作品は、受賞録に作品名、氏名等を記載することがある。
- ※入賞作品を収録した受賞録は、彦根市ホームページ上で公開する。

四 賞

優秀作品には、「舟橋聖一顕彰青年文学賞」を授与する。

正 賞	賞状および舟橋聖一色紙
副 賞	金 十五万円

※なお、佳作はなしとする。

五 発表期日
令和七年十一月～十二月（報道関係に発表する。）

六 授賞式
令和七年十二月（予定）

あと書き

第十九回舟橋聖一文学賞

第三十七回舟橋聖一顕彰青年文学賞

本作品集は、受賞作品ならびに作品の講評

などをまとめたものです。

受賞者への感謝とお祝いを申し上げます。
おめでとうございます。

令和7年12月

編集・発行 彦根市
事務局 滋賀県彦根市尾末町8番1号
彦根市立図書館内
「舟橋聖一記念文庫」事務局
TEL 0749(22)0649